解　説

鈴木　克己

ここに訳出したアラス・エーレン『異郷もまた故郷』は、彼のベルリン三部作詩集の最後を飾るものだ。その第一作『ナウニン通りのニヤジは何を望むのか』の主人公ニヤジが本作でも登場するが、群像の一人に過ぎず、むしろエミネが前面に押し出されている。ここでは、エミネとネジェットとケマル一家に関するものに絞って訳出した。この部分がこの作品の縦軸となっていると考えたからだ。省略した部分ではベルリン・クロイツベルクに昔から生活している住人や社会の底辺で必死に働く労働者たちが描かれている。それはいわば作品の横軸といえる。

一九六一年十月、西ドイツ（ドイツ連邦共和国）はトルコと労働力募集協定を結び、その結果、翌年六二年には、すでに一万八千以上の人間がトルコからの外国人労働者としてドイツで就業している。六五年には一桁増え、十三万二千八百人、そして七一年には外国人労働者として最も多かったイタリア人の数を超え、四五万三千百人となった。

トルコ人に関しては当初滞在期限が二年と決められ、さらに家族の呼び寄せもできないことになっていたが、トルコ人熟練労働者を抱える企業は、滞在期限の限定の撤廃を求め、六四年にはこれが撤廃される。さらに翌年には家族の呼び寄せに関しても、条件付きでできるようになる。

ケマルの娘エミネがドイツに来たのは一九六八年、おそらくケマルは遅くても六五年にはドイツに来ていたと推定できる。トルコ人に関しては三年滞在し、家族が生活するのに十分な住居を用意することが、六五年の呼び寄せの条件となっていたからだ。エミネはもうすぐ十六歳になるところ。すでにドイツでの生活はトルコでのそれの倍以上の年月が経っている。エミネにとってトルコは異郷であり、いま暮らしているドイツが自分の故郷だという思いが強い。だから親にはその理由を言わず家出してしまう。当然一六歳の娘を結婚させようとする親には彼女の気持ちは分からない。労働移民の一世と二世との確執がここに生まれる。

ではどうして婚約者ネジェットと一緒に居たのか。それは彼女の交友関係が狭いゆえに、他に選択肢がなかったからだと考える以外ない。それも二世が直面した現実であった。単純にドイツ人と同じではない、ということがここに描かれている。

さてエミネとネジェットはこの先どうなるのか。この詩が書かれたのは一九七九年、すでに三六年前のこと。エミネにもネジェットにもいまは子供がいることだろう。もしかしたら孫がいるかもしれない。現在人口八千九二万のドイツに七百二四万人の外国人が住んでいる。移民二世、三世はドイツ国籍を持っていれば、統計上は外国人に算入されないので、移民を背景にもつドイツ人はかなりの数に上ると考えられる。ドイツが多民族社会と言われる所以はここにある。

ところで、いまドイツ東部ではペギーダ（西洋のイスラム化に反対する欧州愛国者）がイスラムへの反発を強めて示威運動を行っている。その構成員はかつての東ドイツの市民が多数を占めていると伝えられている。ドイツ統一以前の歴史を共有することができないということのあらわれか。それでも、多民族社会化は進んでいるのが現実なのだ。

エミネの詩が出版されたのは一九八〇年、トルコとの労働力協定が結ばれて約二十年が経つ。それから三十五年、エミネがドイツに留まり、そして彼女に子供がいれば、子供たちは成人し、社会の重要な構成員になっているだろう。もちろん彼らにとってドイツは生まれ故郷である。彼らがイスラム教徒であろうとなかろうと、ドイツ国民であり、その事実を、そして彼らの

歩んできた歴史を否定することはできない。

移民第一世代でありながらエミネの父親ケマルとは違い、社会や人生に対する何か行き場のない怒りを抱くネジェットや、父親のような第一世代とは違い、その違いを認めさせられずにもがき苦しむ第二世代のエミネは、この後どうなるのだろうか。

詩人エーレンはナウニン通りのいま現在を淡々と詠う。希望に満ちた未来を調子外れの鼻唄で歌うこともなければ、絶望に襲われ暗い顔つきで先行き見えない将来を歌うこともない。辛いこともあれば、嬉しいこともある。出て行く人もいれば、やって来る人もいる。天に召される人もいれば、この世に生まれる人もいる。

＊　＊　＊

一九三九年イスタンブール生まれの詩人アラス・エーレンは、一九六九年九月西ドイツ・ベルリンに来た。彼曰く、それは「個人的亡命」。彼にとってこれが初めてのドイツ滞在ではなかった。すでに役者としてドイツの演劇祭に参加し、一時役者としてドイツで働いた経験もある。しかし徴兵で一時帰国する。その後戻ったイスタンブールでも劇場で仕事をする演劇人だった彼は、六九年に渡独した当初、工場や飲食店で働き、糊口を凌ぐ。さらに役者をしたり、脚本を書いたりして生活の糧を得ていく。そして七三年、彼の詩集『ナウニン通りのニヤジは何を望むのか』がドイツで出版される。労働移民としてベルリンに来たニヤジを巡って綴られた詩は、「労働移民文学」の初期の一作となるが、この作品自体を評価しようとする批評家は当初少なかった。むしろ文学批評家以外の人たちがこれに注目し、すぐにテレビ映画化される。ここで彼の創作活動に関して指摘しておきたいのは、この作品を含め彼の作品は、トルコ語で書かれ、出版前に翻訳家と共同で翻訳作業をしてから、翻訳出版されるということ。

ベルリンを故郷と決め、その気持ちを強めるかのように、次々とベルリンを舞台に作品を書き続けるエーレンだが、その創作の言語がトルコ語であるという点で、彼の創作活動は屈折している。彼は、ドイツを職場だと割り切り、長期休暇のときには大量の土産を持って里帰りする移民一世たちに共感を覚えているが、彼らとは生活の実態は異なる。彼には里帰りする場所はない。亡命者ならいつかは故郷に帰ることができるかもしれない。しかしエーレンに帰る場所はない。そこでベルリンを故郷とすると宣言する。この屈折が、彼がトルコ語で綴り続ける動機となっている。つまりベルリンを故郷としながらも、ドイツ語で綴るのではなく、彼が仲間だと心を寄せる労働移民たちの言葉で、トルコ語でエーレンは詠う。

八五年、ドイツ語を母語としないドイツ語作家を表彰する第一回アーデルベルト・フォン・シャミッソー賞をエーレンは受賞する。ドイツ語を母語としない点では問題ないが、エーレンがドイツ語作家かと問われると、首肯し難い。その点ではこの受賞は逆説的ではある。だがドイツ文学の地平を開くという点では大いに貢献する作家であることは確かだ。

九十年代に入ると、エーレンは精力的に小説執筆に携わる。それらもトルコ語で書き下ろしてから、翻訳作業を経て出版されている。七十年代半ばから始めた自由ベルリン放送では、製作担当者であったので、ドイツ語が不自由であるとは思えない。移民第一世代であることを忘れないために、トルコ語で綴り続けているようでもある。あるいは、時に異邦人となって、どこか異質な視点で対象を捉えようとしているのかもしれない。

かつてエーレンはトルコとドイツの文学に橋を架けようとした。しかし、その橋が両岸にも繋がらず、しかも橋の両端が見えなくなり、橋の真ん中に詩人は立ちすくんだ。しかしいまでは、橋を渡りきるのではなく、微妙なバランスでその橋に立ちとどまり続けることが、自分の使命であると心得ている。